

## 共同研究プロジェクト

# 企業環境の変化と社会的責任

## ＜中間報告＞

プロジェクト代表 大田 博 樹

企業を取り巻く環境は、環境問題の深刻化や技術革新、消費者の意識の変化など絶えず変化している。このような企業環境の変化が企業の社会的責任に対してどのような影響を与えているのか、また、企業に責任があるとしたら、なぜ企業という組織が責任を負わなければならないのか、その理論的根拠について様々な視点から整理し、社会的責任の本質について明らかにする必要がある。本研究は、このような問題意識から始まった。研究調査期間は、2022年4月1日から3年間を予定している。

まず、2022年度は各メンバーが各自の問題意識に基づき研究テーマを決め、それに沿った研究を進めるとともに、月に1回のペースで経営倫理や社会的責任論を中心とした共通図書を決め、担当者が報告する形で研究報告会を行なった。具体的には土田健二郎（2014）『江戸の朱子学』、尾崎俊哉（2019）『ダイバーシティ・マネジメント入門』、西田幾多郎（2012）『善の研究』、ハンナ・アレント（1994）『人間の条件』、セラーズ、ウィルフリッド（2006）『経験論と心の哲学』、上村達男（2021）『会社法は誰のためにあるのか』などの文献を取り上げ、担当者の報告後に意見交換を行った。また、セラーズについては、さらに詳細に考察する必要があると判断し、通常の研究会のほかに別途「セラーズを読む会」を立ち上げ、有志でセラーズの研究を続けた。

2023年度も引き続き、各メンバーが自身の研究テーマに沿い研究を進め

ることとした。マックス・ヴェーバー（2020）『職業としての政治』やハンナ・アレント（1994）『人間の条件』、船越多枝（2021）『インクルージョン・マネジメント：個と多様性が活きる組織』、見城悌治（2009）『金第報徳思想と日本社会』、榎本守恵（1967）『北海道精神風土記』などの文献を取り上げ、前年度と同じように担当者の報告後に意見交換を行う形で研究会を進めた。残りの研究調査期間においても文献研究を進めていく予定である。

現代社会において企業が果たす役割は大きくなっている。それは製品を作り雇用を生み出し納税をするというだけではなく、社会課題の解決に貢献するなどこれまでの企業経営に求められてきた範囲をはるかに超える領域まで拡大していると感じる。このような認識のもと、本研究プロジェクトの成果として、企業の社会的責任の概要を定義し、その理論的根拠について考察することで、現代企業における企業理念の考え方や経営戦略を再考し、今後の成長戦略に必要な概念を提供することが可能となることが期待される。